暮らしのぞき箱

季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第一七三号〜

雨水（うすい）　二月一九日

心のしつらい

内宮前の五十鈴塾が和の暮らし、人の輪を大切にしていきたいと、週末に限って伊勢の家庭料理でもてなす「こじはん」。誘っていただき、久しぶりに行きました。

二月は節分にちなみ、「大豆ごはんと鯛の煮つけ」です。テーブルについて、目に入ったのが月替わり料理のイラストでした。色鉛筆で手書きされた料理に、おすすめコメント入り。その手作り感が家庭料理によく合います。細やかな気配りにすっかりと心地よくなりました。

座敷は障子（しょうじ）越しの柔らかな日差しで、床の間には御軸が掛けられ、季節の花が飾られています。テーブルの一輪挿しにも小さな花が活けられ、そこに春の訪れを感じました。

立春が過ぎるころから、比較的暖かい伊勢にいても私たちは春の気配を見つけては喜びます。春への希求が、部屋のしつらいにも表れます。

京都の高台寺近くの名高い料亭「和久傳（わくでん）」の女将、桑村裕子さんは、毎年上巳（じょうし）の節句のころに出すお人形があるそうです。その人形にちなむお客さんとのやりとりを「心のしつらい」という文章に綴っていました。

「しつらいは、人それぞれが大切にしている言葉で言い尽くせない思いが、余白や余韻となって、そこにあること、が何よりと思っています。身の丈やその時分に通うことを心して、また女将である前に、ひとりの給仕として、今日お迎えする方々の無病息災を願うこと、しつらえることは、一つにつながっています」。（『目の眼』三月号より）

豪華なものであるより、季節を感じさせる小さな花であったり、器であったり。むしろ慎みの中にこそ感じる、「心のしつらい」。なにか、私なりの春の訪れを探したくなりました。

文　千種清美

伊勢内宮前
おかげ横丁